

大城立裕と沖縄のユタ文学

宮川 耕次

日本大学大学院総合社会情報研究科

Oshiro Tatsuhiro and the *Yuta* Literature of Okinawa

MIYAKAWA Koji

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

It is widely recognized in Japan that in the 1980s Oshiro Tatsuhiro created the genre of *Yuta* literature: fiction concerning female shamans in Okinawa. His aim is to explore the cultural identity of Okinawa, especially after it was returned to Japan after the US occupation. For the last forty years, Okinawa has been colonized by both pre-modern and modern Japanese authorities and the United States, and it still continues its struggle to exercise its own rights as a region in the postcolonial era.

Oshiro believes that Okinawa must establish its cultural identity in order to deal with its problems. He also believes that *Yuta* represents the social and cultural traditions of Okinawa and examines various situations concerning *Yuta* women in contemporary Okinawa.

In this thesis, I would like to examine Oshiro's *Yuta* literature and to discuss the extent to which his literary efforts have succeeded, and I would also like to examine *Yuta* literature itself as a potential reintroduction of the magical in Japan.

はじめに

戦後 65 年、沖縄の本土復帰から 37 年が経った。戦後、沖縄の歩みとともに沖縄を見つめ文学活動に人生を賭けてきたと言っても過言でない大城立裕、沖縄初の芥川賞作家である。

大城の文学活動は、1972 (昭和 47) 年の沖縄の本土復帰を境に、大きく変化していく。それまでは、沖縄が日本本土から分離されて米軍による土地接収、島ぐるみ闘争、本土復帰運動と政治が前面に出ていた。その中で大城の文学は、米軍基地を扱った短編「カクテル・パーティー」や沖縄戦を題材に沖縄の死生観を描いた短編「亀甲墓」などが中心的なものであった。

復帰後、日本本土社会への適応をめぐる課題が、クローズアップされる。大城は、沖縄のアイデンティティの確保と、本土社会への沖縄の個性の発揮および貢献を目指すようになる。大城の持論である「沖

縄問題は文化問題である」¹や「同化と異化のはざま」²という沖縄の立ち位置が復帰前後に相次いで表明されるのである。

まず、大城の「沖縄問題は文化問題である」というテーゼは次のように説明できる。民族統一にとって、薩摩支配、琉球処分、沖縄戦とサンフランシスコ条約は三つの機会であり、挫折であった。それでも、なお懲りずに「復帰」という第 4 の機会の選択をした。歴史的な反省もないまま、また挫折するのではないかと大城は問題提起した。その上で、「戦後いち早く復帰運動が進められてきたのは、四百年来の系統発生をくり返しているようなものだが、その心は「民族統一」の本能に動かされたということであろう」とその理由を述べる。さらに大城は、「民族統一は単なる本土への同化ではなく、(中略) 沖縄のニライカナイ信仰や御嶽信仰、先祖崇拝など沖縄の文化の日本文化への貢献は可能であり、それによって挫折は免れる」と言う。つまり、「沖縄の復帰は、

ひろい意味で文化問題である。」と大城は主張してきた。

また、「同化と異化のはざま」においては、「日本なしで生きたい」という願望と、「日本なしに生きられるか」という疑問とが共存する。そのように揺れ動く沖縄人の心情を語っているが、その背景には、過去400年来、沖縄にヤマトへの同化を強いて、言語や文化など沖縄文化を滅ぼすという植民地的支配があった。

大城は、こうした主張をする一方で、復帰後は沖縄文化、歴史など個性の発掘、土着文化へのこだわりを続ける。その中で、沖縄文化を「やさしさの文化」と定義し、これを女性文化と共同体が育んだ文化だと規定する。

女性文化については、県都那覇市の国際通りにある「平和通り」の市場で生きる女性たちの風景をその象徴に挙げ、生活力や明るさ、相互扶助などを強調する。そして、小説においては、1980年代から約20年間に亘って、ユタ文学を提唱し、沖縄の現代文学において、その先駆けとなった。

本稿では、大城における沖縄文化の根っこに存在するユタ（神カカリヤ）³文学について考察し、ユタ像やその内面世界を明らかにし、沖縄文学の可能性を模索する。

1. 大城のユタ文学作品とその背景

(1) ユタとは何か

沖縄における女性文化を語る時、まず、おなり神信仰があると言われる。おなり神信仰とは、女性は生まれながらにして霊力をもっており、兄を守護するとの信仰である。⁴これが沖縄の古代社会においては根人（村落の按司で政治を司る）に対して根神（宗教を司る）の関係となり、琉球王国では国主（政治）に対する聞得王君（宗教の最高権威）の関係となった。そして、聞得王君には王妹もしくは王妃が任命された。さらに、その信仰を裏付ける兄妹婚の島建説話も多く伝わっている。⁵

そして、おなり神信仰が社会的に広がっていく中で、女性を中心にした母系家族から地域へと拡大され、その村落祭祀を司るのをノロと云い（宮古、八

重山ではツカサ、サス）、村落ごとに複数がクジにより選ばれ、祭祀集団を形成する。これに対し、ユタは個人を対象にトランス状態で祈願をする。ユタは先天的な能力をもっているのが一般的であり、ノロは必ずしもそうではない。（ユタのように神がかりする人もいる。）

古くは、ユタとノロは一体のものとして機能してきたが、琉球王国で宗教組織の統合がなされて以来、ノロは官職に止まり、ユタは官職から追放された。これに伴い、ユタに対する差別、弾圧政策が戦前まで続いた。

だが、民間において、特に女性たちはユタを高く評価し、沖縄では「医者半分、ユタ半分」などとも言われるほど、心身が病んだ時、病院で近代医学による診察を受けるだけでなく、ユタ通いもして相談してきた。沖縄でも、知識層の一部にはユタを嫌い、世の中を惑わす存在として見ている向きもあるが、社会の近代化、合理化が進んでも、ユタは減少するどころか、むしろ増えてきている状況にある。

ユタについては、これまで精神医学の面から一種病気説も言われてきたが、最近理解が進み、人間のより新しい分野として見直されている。NHKスペシャル番組「脳と心」（1994年3月20日放映）も、無意識と創造性との関連で、宮古島のカンカカリヤの神秘性を取り上げ、その解明を試みている。また、精神科医の渡辺哲夫は、著書の中で宮古のカンカカリヤ世界を分析し、精神病理学再生の可能性を問うている。⁶

(2) 大城のユタ文学作品

大城は、ユタ文学の先駆けとなる作品を1980年代から次々と生み出してきた。沖縄の土着文化の中でも、ユタは大城にとって最も土台となるものである。民俗学者谷川健一氏とのユタをめぐる談話⁷において、「沖縄の文化の中で一番変わらずに続いているものはユタだけだ。」と述べている。

大城のユタ作品は数多くあるが、本格的なものは次の4つの短編である。

「無明のまつり」 1981年

「厨子甕」 1986年

「迷路」 1991年
「巫道」 1992年

大城が描いた魅力ある沖縄女性には、短編「亀甲墓」（1966年）の戦時体制下、墓の中で生きる強さと信仰心を貫くウシや長編『神女』（1985年）の第一尚氏最後の国王尚徳と恋する久高島の神女ノロのクニカサなどがいるが、これら4編に登場するユタと共通性が見られる。以下、これら4編を概説する。

「無明のまつり」（1981年）

多和田勝子は夫と息子を事故で相次いで亡くし、福元シズというユタを買ったが、夫の多和田家の遠い先祖の供養を怠っているとわれ、シズと一緒にその墓を訪ねる。沖縄本島中部地区の東海岸沿い、岡の頂付近に連なる按司墓群の袖にみすばらしい墓があった。多和田家の15代前の先祖は、読谷山、座喜味按司から岐れて高志保の城を立てたが、やがて嘉手納の按司に攻め滅ぼされたという。

勝子は、シズが指定した墓をめぐる反発し、同時に武士の幻を見て、卒倒する。その後、勝子はユタになり、シズを「偽ユタ」と罵る一方で、按司と思われるドクロを掘り出し、その場所のあるサゲーリ山に自治会にも図って按司墓をつくる。

多くの人びとが勝子の所へ相談にくるが、北谷の水釜から来た宮里サダ子が按司墓の向きが違うと言う。勝子は水釜へ向きを変える修理を許すが、勝子のユタとしての自信が傷つく。一方、訪問者の質問に対する啓示がない時には、若い白髪の男がやってきて勝子を抱き、交わりながら啓示を与えるのである。

鬼子の息子のことで相談に来た仲本夫婦が、墓山にある按司墓を誤って拝んでいる可能性があると言う。勝子が神に訊ねると、啓示は、按司墓の袖のみすばらしい墓を示した。それを告げると、仲本夫婦はその墓が「乞食」になった按司だったとの噂を聞いたことがあり、その墓を先祖の墓とすることに納得しない。

以来、勝子は自分の巫の力に自信をなくすが、若い白髪の男に慰められながらユタを続ける。しかし、シズに按司墓の向きを間違えたことを指摘されたり、

一帯に石油基地の建設計画が持ち上がると、これまで勝子に相談していた自治会長もシズに相談するなど、勝子はさらにユタとしての自信を失くしていく。

ユタの内面を描いた最初の作品と大城が言う「無明のまつり」は、ストーリーの面白さもあって読者を惹きつけるが、ユタ文学の特徴が多く観察される。一点目は、既存のユタと新規のユタとの対立と抗争である。神の声を聞き、その啓示によって訪問者に対していく巫の力は客観的な判断基準がないため、対立も起こる。⁸二点目は、創生神話が出てきており、ユタの巫力が地域の古代を照らす手がかりとなっていること。三点目は、白髪・白髭の男がユタを応援する姿が描かれていることである。

「厨子甕」（1986年）

悦子は小学校の教諭で、消防士の夫・真謝康一と姑のトシの三人で暮らしているが、ある日、比嘉鶴子というユタが家を訪ねてくる。安次富千恵という女が子供を産み、その子が喘息で苦しんでいるので、その祖父の位牌を拝ませてほしいと訪ねてきたのだ。

翌朝、悦子は夜勤から帰宅した康一に安次富千恵について問いつめる。千恵の家が火事になり、千恵は逃げ遅れて首筋に火傷を負った。消火に当たった康一は、それが自分の責任であると思い込み、見舞いに行っている内に親しくなり、子供を産ませたと白状する。その時から悦子の頭痛が始まる。

子供の認知、命名や真謝家の先祖のことなどをめぐって会話が交わされる中、子供のいない悦子にとって、夫を奪われるかどうかの瀬戸際となる。そのような状況の中、悦子はユタになり、不発弾処理に当たった康一の危険を察知し、これを未然に防ぐ。さらに義父・康信の霊と会い、位牌と自分のプライドを守ることになる。

悦子は、夫康一が千恵に子を産ませたことにショックを受けて頭痛が始まり、苦しむが、それが契機になってユタになる。康信の死霊を見、会話をする。この時、悦子は千恵のアパートの「鏡」を見、神からの啓示を受ける。さらに、アカバナ⁹と厨子甕の幻が一体となって見え、夫・康一の危険を察知するのである。ここに生霊死霊両方に通じているユタの姿がある。一方、比嘉鶴子は、康一の父の厨子甕霊を

神のお告げによって探し出すという、死霊を見るユタである。大城は、夢や幻を再現するのに鏡を使用している。現実と幻の境界を拓く1つのツールとしているのである。

この「厨子甕」が着想された背景とユタ像について、大城は「巫女の風土」(あとがき)で次のように述べている。¹⁰

沖縄県立博物館では、石造りや陶器の「厨子甕」(骨壺)の収蔵が多いが、施設が手狭なために、それを軒下に並べてある。私が勤めていた頃、ある日、一人の中年の女が一つの厨子甕の前に座って、しきりに祝詞を唱えて拝んでいた。(中略)この人はユタ候補生だと私は思った。後刻事務所で話したところ、その訴えによれば、屋敷のことで揉め事があって悩み抜き、二週間ほども眠っていない、というものであった。精神的な悩みの末に神憑りがはじまり、ユタになりかけている人だと見えた。そういう人が多いようである。もともと頭脳が古代的にできている人で、現代的なトラブルを処理しきれなくて、神の世界に逃避するものだと思われる。

大城の描くユタ像の原形がここにある。これについては、他作品との比較において、後段でさらに考察を試みたい。

「迷路」(1991年)

米国人を父に持つホステスの松代は、米国人のような外貌と違って性格や物の考え方は古風で沖縄娘のユタである。この対称がユーモアをかもし出す。

ホステス仲間の佐知が肺炎で入院したので、松代や以前の同僚順子が交替で看病に行く。松代は病棟を間違えたり、ベッドの向き、火の神のことなど突拍子もないことを言って、看護婦の芳枝と喧嘩するなど、人騒がせな存在である。しかし、佐知の病気を直すためにウガン(祈り)をしようと奔走する。

松代はウガンをするべき基地内の拝所の許可を愛人である県庁の文化財課長玉井に頼もうと思っている。その玉井が佐知の見舞い帰りに交通事故に遭って急死する。松代は衝撃を受け、剃髪し、黒衣を着

て、ウガンすることを決意する。そして、「ワサめいて」(胸騒ぎして心がざわめく様子)、一大決心をして御願をしようという松代の行動に順子も巻き込まれていく。

この作品は大城のユタ文学の中で最も評価されてしかるべき佳作と思える。まず、松代の米国人的な風貌に、内面は純沖縄的、古代的という人物造形がユーモアを漂わせる。病棟を間違えたり、病室のベッドの向きを気にしたりして混乱するが、これは近代社会の論理と前近代社会＝沖縄的、古代的価値観の軋みともとれる象徴的な場面である。

次に松代は、ユタの資質を持ちながら、それを職業としてはいないため、ユタでありながらユタと切り切れない所がある。米軍基地の矛盾として米兵とバー・ホステスの間に生まれるが、親に捨てられ、祖母に育てられる。その祖母とも死別するという、どん底の生い立ちながら、ユーモアと心やさしさが松代の行動を貫いている。

松代の神憑りは、先天的なものである。まず7歳の時、無性に母に会いたくてアメリカに行こうと思ひ、ひどく頭痛がして訳の解らない不安に満たされる。家を飛び出し、裸足で一号線を北へと向かう。アメリカへ向かっていると錯覚したまま、三日間も食事をせずに歩き回り、見知らぬ村の拝所を拝み、その後、無事に祖母のところに戻っている。¹¹

また、19歳の時、米軍オフィスで掃除婦をしていたが、ある日、同僚の掃除婦の姿がチラチラと、テレビの画像が乱れるように、さだかではない感じがする。翌日、その同僚がアメリカ兵に強姦されかけたことを聞かされた松代は、前日の経験を思い出し、まもなく幻影を見る。それは言葉や姿、音、絵といった具体的なものではなく、刹那に理解に至る奇妙なものである。まず拝所のイメージが浮かび、今、そこへ行かないとその人のマブイ(魂)が体から落ちたまま戻ってこないという、何かすごい勢いで促していくようなものである。¹²

そんな時、松代は自分から頼んでウガン(祈願)をさせてもらおう。同僚のためというより自分の気持ちを落ち着かせるために。この対応も普通ではない。自分のためにウガンをするというのは殆どないからである。しかも松代は、依頼されてもすべてに応じ

るわけではなく、自分の頭がワサワサと揺れるときだけである。そういう時は頼まれなくてもウガンを行い、謝礼はもらわない。自分の精神安定のためと思うからである。¹³松代はプロのユタではないが、精神的には完全なユタと言える。

松代の剃髪についてだが、愛人の玉井が病院からの帰りに交通事故に遭い死んだ場所は、直前に僧侶一行が通ったのと同じ所であった。つまり、玉井の死は、僧侶たちの霊力に、松代の巫の力が敗北したことを意味する。それを認めた上で、僧侶の大乗仏教的な力を借りたいという衝動が松代に起きたためと考えられる。

「巫道」(1992年)

ユタの「私」は、1695年、1700年、1703年の三回に亘って、平等所(今の裁判所)に引っ張られ、取り調べられる。初回は、30年前にユタの御願が禁制になっていたにもかかわらず、津嘉山親方光祐の母が病気で直らないため、秘密裏に屋敷に招かれ、御願をして治したために、医者之久手堅親雲上に訴えられたのである。

二回目は、光祐の奥方から夫の傾城狂いを治したいとの依頼を受けたときである。御願をすると光祐に子供ができたことを知らされる。さらに、光祐の祖父は実は薩摩侵入の際に強姦された女から生まれた薩摩侍の子であり、津嘉山家が祖父の供養をしていないこと等が明らかになる。そして、子を生んだ遊女は、「私」の妹マカトではないかと推測し、「私」は驚きながらも、光祐にマカトを身請けするよう迫る。結果、光祐の奥方が平等所に訴えたと考えられる。

三回目は、光祐に訴えられたときである。マカトの子が原因不明の熱を出したが、それがカマドの生霊の呪いであることを突き止め、それをさせているのが光祐の奥方であることを知る。そして、「私」は素焼きの人形を使って光祐の奥方とカマドに生霊の呪いをかける。ほどなく光祐は、マカトの子を籍に入りたいと「私」に告げ、さらに奥方に呪いかけるよう頼む。

その後、「私」は光祐によって訴えられることになる。

「巫道」はユタ弾圧の歴史を背景に、ユタの証言

という歴史モノローグで、人間の精神活動の奥深さと多義性を孕む。ユタ弾圧とユタの存在の必然性が交差し、ユタが減びるところかむしろ増えていく様が伝わってくる。強く印象に残るのは、ユタによって相手を病気に追いやり、あるいは死に至らしめるという、生霊の呪いである。

(3) 4作品のまとめ

大城はこれらユタを主題とする短篇について、次の五点について言及している。まず、「無明のまつり」の勝子と「厨子甕」の悦子がユタになった理由や契機は、夫と息子を事故で亡くしたことや夫が浮気し、相手の女に子をませたことの衝撃による。「迷路」の松代は先天的にユタの資質を持っていた。「巫道」の「私」は、母が亡くなって家が貧乏になり、妹をジュリ(傾城)に売った辛さからユタになる。そして、こられる悩みや辛さの原因は、勝子と悦子の場合、先祖供養の不足であり、松代は突然やってくる頭のワサめきであり、「私」は妹を孕ませた殿内の先祖の供養不足である。

次に、「無明のまつり」において先祖の神の根元にいる神、つまり沖縄の天地を創った神のことを勝子が口にする場面がある。「私は島が減びることを確かめるためにユタになったようなものではないでしょうか。その前に墓たちの素性を明らかにすることが、私の前世からの務め」と言うが、これは現代沖縄におけるユタの存在理由であり、大城のユタ文学の意義である。

三点目は、ユタは歴史的に近世(薩摩侵略以後)になって弾圧され、それは戦前まで続いたが、ユタは決してなくならない文化として存続し続けているということ。

四点目。ユタの展望として大城は次のように語る。「ユタの問題点として先祖祭祀を正すあまり親戚縁者に迷惑をかけることや神を勝手に祀るなどであるが、これらを改良するための一助として、現世利益のみを事とするユタの教義に、大乗仏教に類する体系を打ち立てよ。」¹⁴こうした大城の考えがあって、「迷路」における松代の、剃髪し、袈裟を着て御願をするという行為が生まれた。

五点目にユタ同士の競争や喧嘩である。特に「無

明のまつり」における勝子とシズの土俵での喧嘩の夢は凄まじい。実際、ユタ同士は、巫の力を競うため、ライバル心やプライドをぶつけ合うという。¹⁵

以上5点を踏まえると、ユタ文学について大城はユタになる契機や理由を語るとともに、ユタの多くが苦しみや不幸の結果、ユタになることを示している。さらに歴史的に弾圧された経緯やユタの功罪から、ユタは体系化し、教義化されるべきであるとも考えている。

2. 文学におけるユタの造形

ユタの造形については、いくつかの項目を設定できるように思われる。まず、ユタの内面における神の存在の状況がある。ユタに啓示を与える神は四つあると言われる。父なる神、仲取りの神、守護神、指導神。¹⁶父なる神は、主に天や宇宙につながる。仲取りの神は、神とユタを仲介する。守護神は先祖や島の主であり、指導神はユタを指導する。この考え方によると、「無明のまつり」に出てくる白髪の男は、仲取りの神ではないかと思われる。神は良い神だけとは限らず、中には邪神もいて、その人を地獄に引っ張り込もうとすることもある。

次にユタの巫力、霊能度の強弱がある。三つ目に、ユタが生霊を扱っているか、死霊を扱っているかという区分も大事な要素であり、死霊は一切扱わない人物もいるし、両方扱うのもいる。さらに、ユタになるのが先天的なものか、後天的なものかということも重要な要素である。ユタは一般的に神の召命によるものであるが、その人の不幸や悩みなどによって後天的にユタになるとの考えもある。

これらの項目に沿って、ノンフィクション『神に追われて』（谷川健一、2000年）、および第6回日本ファンタジーノーベル大賞を受賞した『バガージマヌパナス』（池上永一、1994年）と比較しながら、大城のユタ造形を考察する。

まず、大城のユタ文学の4つの短編を項目毎に整理してみる。

人物	作品名	神(性別)	巫力	生・死霊	先(後)天性	正(邪)神	その他
勝子	無明のまつり	2人(男)	△	死	後天	正	
悦子	厨子妻	-	△	死	後天	正	
松代	迷路	-	△	死	先天	正	
私	巫道	-	○	生・死	後天	邪	
綾乃	バガージマヌパナス	1人(女)	○	生・死	先天	正・邪	地獄がある
カナ	神に追われて	3人(男)	○	生	先天	正・邪	

○ 強い確信 △ やや確信 × 確信がない

表によると、神と交渉をもつのは勝子だけである。大城のユタ文学が、神の存在を提示し、ユタとは神との交流媒体であることを示したことをまず確認しておく必要がある。巫力について、「巫道」の主人公の「私」だけが強力な巫力を発揮して、医者が治せない病気を治したり、生霊の呪いなども力強いが、他は、半信半疑の、弱くて悩めるユタである。また、大城作品の多くが死霊を扱っているのも特徴と言える。さらには、大城は先天性と後天性のユタ両方を描いているが、全体的に後者の比重が大きい。それはユタ像の多様性とも言い得るが、ユタがその基本において神の召命によってユタになるという基本を踏まえたバリエーションとしての多様性でなければならないと思う。

谷川健一のユタ（カナ）は特定の人物をモデルとするノンフィクションということもあって、実像に近い。神の求めに応じてユタになるのだが、谷川はマウ神（守護神）、ツヅの神（先祖神）、乞食姿の杖つきの神の3者を挙げている。カナは墓には行かず、従って死霊を扱わない。

池上永一のユタは、谷川同様、先天的なもので、神の召命による。さらに、宇宙で祖母と会うなど死霊と交信し、地獄の渦をも示す。ユニークなのは、ユタ候補の綾乃が神の召命を拒否して喧嘩する設定である。普通、ユタに対し、神は絶対的な力を有しており、喧嘩する対象とは考えないからである。また、ユタの御願について、死霊を二度殺さないためには生者の思い入れこそ必要という説明には説得力がある。神を1人描いているがユタと同性という珍しい形である。

大城と谷川、池上の三者を比較すると、神は三者ともに存在し、多様である。巫力については、大城の方は自信が無く、弱い点も多い。生（死）霊につ

いては、大城は死霊が多く、谷川は生霊、池上は両方扱っている。ユタの先天・後天性については、大城は後天性を重視し、他は先天性で捉える。正（邪）神では、とくに大城の呪力が際だっている。

大城がユタの内面に迫る作品を創造して、沖縄文学の裾野を耕してきたことの意義は大きい。大城は、先祖の供養を怠ってきたというユタの視点を主張するとともに、沖縄の先祖の掘り起こしによる沖縄文化の原型を彫り出す文学の創造を目標とする。

しかし、次のような大城のユタの捉え方には違和感を覚える。

ユタは同時代の文明と体制下に生きなければならぬ人たちのスケープ・ゴートだ、という思いが募るばかりである。「基地」という文明と体制の下で、ユタが増える事情がここにある。¹⁷

沖縄文化の深みには降りず、基地という厳しい状況の中で「犠牲者」という認識である。ユタは神の召命によって成る者、選ばれた者でなく、不幸に悩んでユタになるのであって、誰もがその要素をもっているといった捉え方にひっかかるものを覚えるのである。ユタが選ばれた霊能者であれば、さまざまな神との交信によって幅広く宇宙を含めた啓示によって沖縄文化の原型、ユングの集合無意識の境地を拓くという、積極的な位置づけが可能ではないかと思う。

3. ユタ文学研究の地平

ユタについての研究は、民俗学や文化人類学などの分野で進められてきたが、歴史学としての研究は遅れていると言われる。¹⁸また、文学研究も活発とは言えない。

まず『沖縄宗教史の研究』によって、ユタについての研究成果を概観したい。「ユタ」についての最古の資料は「おもろそうし」巻八にある。

- ①「よた」すなわちユタの語は古琉球時代¹⁹にも存在していた
- ②オモロ歌人の「あかの、おえつき」はユタと称されていた

③古琉球時代にユタと称されていたのはオモロ歌人たちで、彼らが最初であった可能性がある

④ユタの語源は、「ユンタ」であるかも知れない（伊波普猷の考え方）

⑤公認されていた古琉球時代と排斥・禁圧の対象となった近世のユタの状況とは異なる。

一方、最近のユタ文学研究において注目されるのが「再魔術化する世界と沖縄文学」と題する塩月亮子の論考である²⁰。これは、沖縄国際大学が「文学からみた沖縄の戦後 60 年」と題して 4 年前に開催した南島文化市民講座の一環である。また、与那覇恵子²¹の論考「沖縄文学の表象～その女性像を通してみる戦後沖縄」も評価したい。

塩月は現代を脱魔術化時代から再魔術化へ向かっている時代と規定する J. リッツアらの考えを紹介しながら、「再魔術化」を次のように再定義する。

近代化は合理化の過程であり、前近代的なものが非正統的なものとして区分・周辺化され、正統性を奪われていく過程である。例えば、国家や宗教的権威、マスコミ、世論など近代的な言説権力のもとでは、前近代にみられた一連の信仰は「迷信」というレッテルを貼られ、弾圧、排除されていった。しかし、現在はこれまでのような「世界宗教／魔術」＝「正統／非正統」といった単純な二項対立の概念が揺らぎ始めている。すなわち、情報や産業など様々なものがグローバル化し、世界の至るところが中心となるなか、階層化をとまなう二項対立の思考が解体され、これまで周辺化されてきた魔術が脱周辺化し始めたといえる。

従って、「再魔術化」とは、合理化の過程で魔術や呪術が一旦消滅し再び現れたのではなく、周辺化・区別化されながら存続してきた魔術が、区分が無効化される過程で別に怪しいものでも排除すべきものでもないというかたちで普通に受容された現象と捉えられる。それは、また、現代沖縄文学にも当てはまるといえる。

塩月は、このような時代認識に従って、近年におけるシャーマニズム研究の動向や日本文学にみるシ

チャーマニズムなどについて、貴重な分析を行っている。さらに、沖縄文学の動向も詳説しており、ノロ文学からユタ文学への変遷や沖縄のカンダーリ文学についても触れている。

この中で塩月は玉木一兵の『神ダーリの郷』(1985年)と大城立裕の『迷路』(1991年)、池上永一の『バガジマヌパナス』(1994年)、谷川健一の『神に追われて』(2000年)の4つのユタ文学を比較しながら考察を深めている。近代に懐疑を抱きつつもその側に立つ医療従事者の玉木、ユタを近代において取り残された太古の存在と捉える大城、文化表象としてのユタ・イメージを取り込みながら、死者との交流においてユタの存在意義を示す池上、民俗学者として実際のカンカカリヤやユタを数多くみてきた経験から、共感をもって彼女たちの体験をまとめた谷川を、それぞれ分析している。

そして塩月は、マジックリアリズムの有効性を提唱するとともに、ユタや沖縄の表象をオリエンタリズムと地続きの世界として位置づけ、「われわれと沖縄」ではなく、「われわれの沖縄化」という新しい視座を示す。さらにチャーマニズム文学についても、従来の自己確立と共に、自己崩壊を経て、再生へとつながる新しいアプローチを取っていると指摘する。

一方、与那覇は、大城のユタ像を理不尽な状況におかれた女性が、最後の逃げ道としてユタを選ぶという設定であるという。さらに、大城は、ユタを、霊力をもつ女性として讃えるのではなく、決定権のない女性の受動的選択と見なし、戦後沖縄のポジションがユタ像に反映されていると指摘する。池上については、ユタのイメージやニューエイジの思想を駆使して「世界の人たちを救う」ユタを造形したと指摘している。そうしたユタ像に否を突きつけたのが、目取真俊の「魂込め」であり、他者を救うことも癒すこともできない、無力なユタを打ち出していると批評している。

他には、1998年には『沖縄タイムス』に3回連載された仲程昌徳のユタ文学論がある。²²仲程は、それまでユタ文学は大城の独壇場であったこと、「頭がだるくなる感じ」や「頭の中がワサワサ揺れる」かたちで、ユタの誕生が捉えられていたこと、そして政治、社会的問題との関係が仕掛けられていたこと

を指摘している。その上で、池上も米軍基地や開発問題をもって来るが、ユタに対する謳い上げ方が天上で亡くなった祖母との対話の中でユタの役割を聞く場面など、圧倒的であるという。大城のユタに近くもあるが、大城がユタを文化として見ているのに対して、池上のユタは肉体あるいは情愛というものとして感受していると仲程は見る。

おわりに

沖縄では大城が創り上げてきたユタ文学についての議論が少なかった。しかし、1994年に池上永一が第6回日本ファンタジー文学大賞を受賞してユタ文学が見直されるようになり、また、ジェンダー研究からのアプローチもあって、近年、ユタ文学研究も活発化してきた。

沖縄文化の根幹ともいべきユタ文化を文学に造形した大城の果たした役割は大きい。ユタになる経緯や内面のありようについても、大城独自の描出は評価に値する。

ユタ像を探れば探るほど、大城の言うユングの集合無意識が示す沖縄文化の原型というものに行き当たった。だが、「無明のまつり」において、沖縄の創生神話が浮上ただけで、ユタ文学の可能性について、その展望を見出すことは難しい。ユタ文学の目的が、沖縄文化の原型、ユングの集合無意識の掘り起こしとする大城の主張が未だ十分に文学化されていないのである。ユングの集合的無意識は、個人を超えた民族、あるいは人類の普遍へと通じているはずであり、ユタ文化はそのような創生神話、歴史的なものへ深化していくことによって展望が拓けると言える。

塩月の「再魔術化」社会におけるシュールリアリズムの可能性、さらに与那覇の「ミステリー、ファンタジー」といったエンターテインメント等の小説が幅広く表現されることによって、〈沖縄文学〉はさらに多重なイメージの層を」という主張にユタ文学の展望が見出せると考える。

再魔術化社会の到来は、グローバル化の進行にもなう、「周辺」の回帰現象であって、グローバル化の一過程である。文学においては、ガルシア・マルケスに代表される1960年代中南米の魔術的リア

リズムに呼応し、響きあう形で他の地域でも同様の動きが認められる。文学が危機的状況にあるとの指摘を覆す文学の活性化である。

沖縄のユタやシャーマニズムへの関心の高まりも、一つには、これまでの西洋中心主義の反動であると言える。大城によってユタ文学が開拓され、ようやく内外で注目を集めるようになってきたが、その本質に迫る研究は、まだ十分とは言えない。しかし、ユタ文学は、地球規模で進行する再魔術化社会を沖縄の特殊性をもって提示する作業であり、文化のグローバルリズムとリージョナリズムの両方を視座におさめた試みとして評価できよう。

¹ 『大城立裕全集 12』 勉誠出版 2002 p. 348

² 同上 p. 301

³ 広く南西諸島においてトランス（変性意識）状態で託宣、祈願、治病などを行う民間巫女。
ユター沖繩本島、奄美諸島、宮古—カンカカリヤ八重山—ネガイビト『沖繩民俗辞典』吉川弘文館 2008

⁴ 外間守善「おもしろそうし」岩波書店 1985 p. 46

⁵ 同上

⁶ 渡辺哲夫「祝祭性と狂気」岩波書店 2007 年

⁷ 『大城立裕全集 12』 p. 240

⁸ 宮古のカンカカリヤ（ユタ）に取材（40代 女性）

⁹ 沖縄の仏桑華のことで、俗にアカバナとも言い、あの世の花との言い伝えもある。

¹⁰ 大城立裕『後生からの声』文芸春秋 1992 p. 274

¹¹ 同上 p. 14

¹² 同上 p. 15

¹³ 同上 p. 16

¹⁴ 大城立裕「光源を求めて」沖縄タイムス社 1997 p. 301

¹⁵ 宮古のカンカカリヤ（ユタ）の説明

¹⁶ 同上

¹⁷ 大城立裕『後生からの声』文芸春秋 1992 p.275

¹⁸ 知名定宏『沖繩宗教史の研究』榕樹社 1994 p.105

¹⁹ 同上 p. 122

²⁰ 『文学からみた沖縄の戦後 60 年』沖縄国際大学南島文化研究所 2005 p. 23-35

²¹ 同上 p. 37-45

²² 仲程昌徳「ユタをめぐる物語」『沖繩タイムス』1998 年 3 月 18 日～20 日